



日本の創薬力問う「製薬再編第2幕」

国内の製薬企業で再編が相次いでいる。三菱ケミカルグループは子会社の田辺三菱製薬を米投資会社に、また日本たばこ産業 (JT) はグループの医薬事業をすべて塩野義製薬に売却する。最初の再編は2005年辺りから火が着いた。世界進出加速への企業統合だったが、足元の第2幕は大きく事情が異なる。

医薬から撤退する三菱ケミカルグループとJTに共通するのは、性格の違う複数事業を抱えるコングロマリットである点。三菱ケミカルグループは本業の化学で、JTは、たばこ事業などで、世界と戦うための投資がいくらあっても足りない。JTは、医薬子会社の鳥居薬品との親子上場という課題も指摘された。

新薬開発のトレンドは、複雑な製造工程を経るバイオ医薬が中心だ。成功が確実ではなくとも、国際臨床試験 (治験) に最も多額を投じなくてはならない。一方、資金力のある欧米メガファーマは、治験段階の値の張る新薬や企業を丸ごと買収している。こうした開発競争に、片手間では到底追い付けない。

三菱ケミカルグループの筑本学社長は、田辺三菱製薬売却の2月の会見で「化学と医薬の関係性が薄れてきた」「新薬開発への大規模投資の実行可能性に制約が生じた」と背景を話した。またJTの嶋吉耕史副社長は先週の会見で、創薬の難易度が高まり、メガファーマと競争が激化するなかで「グ

ループの事業運営で、医薬事業の中長期的な成長が不透明だった」と語った。

製薬のビジネスモデルには「自社創薬型」と、買収で新薬候補を揃える「M&A型」の2つがある。技術革新のスピードが増すなか、欧米メガファーマや日本の製薬大手では近年、M&A型の比重が大きくなっている。

田辺三菱は、ヘルスケア業界にネットワークを有する米ベインキャピタルの傘下に入る。構造改革が進むとともに新薬開発の資金力は高まる。有望なイノベーションを外部から獲得し、成長機会が広がることだろう。

一方の塩野義製薬は、自社創薬を追求する。とくに塩野義、JT双方が得意とする低分子医薬品に力を注ぐ。高分子のバイオ医薬という潮流のなかでの“逆張り”となる。低分子ゆえに脳や細胞に薬効成分が届き、脳神経や中枢神経などの難病薬、感染症薬の実現を目指す。これは量産しやすく世界の患者に届く。

「日本の創薬は最近、元気がないんじゃないか」
一。塩野義の手代木功会長兼社長CEOは、欧米同業に、こう指摘されたそうだ。再編第2幕が、日本の創薬を再び世界の舞台に引き戻す契機となることを強く望む。

(2025年5月14日)